

栄光

説教・「へりくだって、神と共に歩む」
菊地順教師……1

特集・
平和を考える… 2

説教・「祈る心の中心に立つお方」
中村謙一教師…5

初夏の集い…… 6

長老のファイル…7

牧師の書斎から…8

『へりくだって、神と共に歩む』

説教

ミカ書6章6節～8節

フィリピの信徒への手紙2章1節～11節

聖学院大学特任教授 菊地 順

「人よ、何が善であるのか。そして、主は何をあなたに求めておられるか。それは公正を行い、慈しみを愛し、へりくだって、あなたの神と共に歩むことである」（聖書協会共同訳聖書）。

ここで預言者ミカは「何をもちて、わたしは主の御前に出で、いと高き神にぬかずくべきか」（6節）と自問自答してありますが、その結果与えられた答えがこのみ言葉でした。しかし、これはまた私たちキリスト者の答えでもあるのではないのでしょうか。もちろん、そこにはイエス・キリストというみ名が入ってきます。イエス・キリストにおいて、「公正を行い、慈しみを愛し、へりくだって、あなたの神と共に歩むこと」、それ

と語ります。というのも、このへりくだりにこそ、神の愛の本質があるからなのです。

神の愛は、たとえ価値のないものであっても愛し、そこに価値を創造していきます。それは、ちょうど水に似ています。水は低いところへと下っていき、下り着いたところと同じ形を取り、それと一つとなっていきますが、神の愛も同じなのです。キリストは、神の子であるにもかかわらず、人間の形をとってこの世に來られました。それは、人間を深く愛されたからです。そのように、愛は愛するものに似ていくのです。そして、一つとなっていくのです。そして、慰め、励まし、力づけ、それを価値あるものとしていくのです。

と共にあることができるという深い救いの経験をしました。アウグスティヌスは、その時のことを、「昇らんがために、神にむかつて昇らんがために、降りなければならなかった」と語っていますが、アウグスティヌスは、高き神のところへ昇ることは、実際には、キリストという謙遜のもとに降りることであることを知ったのです。

が私たちの究極の答えではないでしょうか。それは、主イエスご自身が正に、このみ言葉のようにへりくだって生きられ、父なる神と一つであられたからです。そして、何よりもこのへりくだることに、神の愛の本質があるからです。

旧約聖書学者の左近淑先生は、この神を「低きに降る神」と表現しましたが、この神は歴史を超えて支配されると同時に、イスラエルの民に救いのみ手を差し伸べられた神でもあります。そして、そのみ手は、時至つてみ子をこの世界へと送り出しただけではなく、み子である主イエスご自身が深くへりくだられ、私たち罪人の足元にまで降りて来てくださったのです。聖書は、ここに神の愛がある

それゆえ、パウロもこう語っています。「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだったものと考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことに注意を払いなさい」と。私たちは、利己心や虚栄心に走りやすい者です。ルターも、「人間は本性上、生まれながらにして神を神たらしめることができない。常に自己を神たらしめるからである」と語っています。私たちが絶えずこの罪深さを自覚し、常に主の御姿を仰ぎ見つつ、へりくだって神と共に歩むことが大切なのです。そして、そこにこそ、人間の最もふさわしい真実の歩みがあり、また喜びと慰めがあるのです。

平和を考える

ロシアのウクライナ侵攻が続き、いまだ多くの命が失われています。

終戦記念日を迎える8月、今こそ平和について考えましょう。

平和とは

岡本四郎

ロシアのウクライナ侵攻から5ヶ月。この間、両国の兵士だけでなく、子どもや老人等の民間人も毎日大勢亡くなっています。また、戦火を逃れるために何もかも捨て、命懸けで故国を抜け出し、世界各地で難民として暮らす人も大勢います。ミサイルや砲弾に怯えながら、今もウクライナで暮らす人々のことを思うと心が痛みます。

戦後生まれの私には戦争の記憶がありませんが、日本でも77年前に東京、名古屋、大阪での大空襲に続き、広島と長崎では原爆が投下され、壊滅的な被害を被り終戦を迎えました。

それから現在までの間に、日本では大震災や火山噴火などによる犠牲者が大勢出る災害がありましたが、戦争がなく穏やかで変わりのない日々が続いています。

広辞苑によると、このような状態を「平和」と言うそうですが、

因みにシドニーに本部を置く経済平和研究所による「平和度指数ランキング」で日本は163ヶ国中の10位（昨年は12位）とのことですので、客観的に見ても日本は平和であると言えるようです。

しかし、私には実感として今の日本が平和であると思えないのは、学校や職場でも「いじめ」や、マスクミで毎日のように報道される暴力、差別問題、それに新型コロナウイルスや、領土問題などが存在しているからかと思えます。

領土問題に関しては、自衛隊や海上保安庁関係者をはじめ、北海道や日本海側の各地の漁業関係者等にとっては平和とはほど遠い毎日を過ごしておられることと思います。

一人ひとりの置かれた環境や立場、考え方の違いによって日本が平和であると考えられる人とそうでない人がいると思いますが、誰もが平和だと思える状態が本当の平和ではないかでしょうか。

皆の祈りが結実し、一人でも多くの人たちが平和を実感できるようになることを願いつつ、希望を持って歩みたいと思います。

平和の祈り

神原 正

戦時中に生まれた私は今日までの79年間、平和な日本で生きてきました。大過もなく生かされてきたことを主に感謝いたします。

後期高齢者というジャンルに入ってしまった。後期高齢者というジャンルに入ってしまった。「鋤を手に振り返ってはならない」と教えにはありますが、思い出として振り返ると一番に挙げられるのは「受洗」です。40年もの間、主の御臨在を知りつつ、呼びかけていくくださる声に気が付きませんでした。姉の外母（細井登志代）が召されるまでの1週間を傍らで過ごし、枕頭での聖餐では半身を起こしてパンと杯を頂く姿を見て信仰を持つことがどれほど力強く、素晴らしきものであるかを目の当たりにしました。召されるときは穏やかな顔にカメラを向けてしまいました。今思うと「我に来よ」讚美歌57番の御言葉が聞こえてきたように思っています。外母が主にとりなしてく

れたのだと信じ感謝しています。

百合丘伝道所で洗礼を授かり、会員の方々と和やかな交わりがとて新鮮な思いで、日曜日待ち遠しく感じていました。立て看板作りなど、小さなご奉仕も担うことができました。

私たちが結婚式を挙げた、この経堂北教会に転会させて頂いてからも、わが家を補修するように会堂のメンテナンス作業を楽しんでいます。日曜礼拝、水曜夜の祈禱会、土曜日の会堂清掃と週に3日も会堂へ行きます。コロナ禍の影響で対面での会話を制限されて楽しい懇談の時間がなくなりました。この夏は、エアコンの必要がないと思われていた高緯度にある国々でも40度を超える熱波に襲われました。気温だけでなく海水温の上昇、豪雨など、神様、あなたの創つてくださった地球が異常気象によって今危機に陥っています。人為的なことではロシア軍のウクライナ侵攻、いまだに猛威を振るっているコロナウイルスの終息を、平和を求める世界中の人々の願いに合せて、主イエス・キリストの聖名によってお祈りいたします。

平和を祈る

永井茅子

この時期、私たちは不条理に腹を立てて失望して、しばしば行き場のない怒りを感じてしまいます。ロシアの一方的な侵略戦争も問題は複雑で多岐にわたり、簡単に解決しないでしょう。他者の悲劇を前にしても涙を流すこともなく、相手に責任さえ押しつけ勝手な振るまいをしている国のリーダー達。思い出してみると私は終戦の時に1才。戦争の事は覚えていませんが、戦後の貧しい生活は記憶しています。一步海岸に行ってみると防風林の中に小屋を建て生活していた人々。戦後というのにアメリカ軍が上陸演習をしていたり、相模湾に、軍艦の数々が駐留。その不気味な景色は今だに忘れず事はありません。昭和25、26年頃、ポロポロの校舎での二部授業、シラミ退治のために頭髪にDDTを散布された等々。平和にはほど遠い生活を送ってきました。そんな

中、幼少期に日本初の音楽伝道者三谷種吉先生の夫人が家庭で開いてくださった集会に出席。これはまさに信仰を支えられた原点でした。物質的には豊かではなかったこの時代、本当に穏やかで平和な一時を持てました。

そして月日は経ち、主人の赴任地のプノンペンでの出来事です。ベトナム戦争が始まった頃、支局の助手、メイドさんが後で戦禍で亡くなったことを知り、またある時、主人たちといっしょに取材に出たカメラマンが亡くなりました。思い起こせばウクライナだけでなく世界各地で本当に悲しい痕爪を残す戦争が起きています。歴史はくり返すと言われますが人間の愚かさはいつまで続くのでしょうか。このいろいろな経験から私たちは平和を作り出していくことの大切さ、それに対する熱心さを持つことが特に重要だと思っています。「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない」(哀歌3:22)というみことはを信じ絶望と苦しみの中にある人々に平和が訪れることを祈りつつ困難な中、歩んで行きたいと思えます。

許して許される平和

島山直子

国家間戦争ではなくても平和と言えない状況は、私たちの身の回りにあふれるほどにある。

若かったころ、自分でも自分を許せないほど、今よりも粗削りで、心ない言動を犯してきた。それは法に触れるものではないが、父母をはじめ、お世話になった方々へ感謝できないままになっていることや、困っている人を助けることができなかったことなど悔いる時、私の心は平和ではなくなる。そして、まだ女性の社会進出が現在ほど開かれていなかった頃に社会人となり、それまで中学高校大学と女子校だったので気付かなかったが、仕事を通じて、給与体系や昇進制度に女性が差別されていることを痛感した。尤もこぶしを挙げ、口角泡を飛ばして女性の権利を訴えるフェミニズムには「違う」と思いつつ、自分なりに闘い続けた体験がよみがえると、悔し

さが再燃することがある。多様性を受け入れる余裕すらなかった未熟さも残念に思われる。それでも、今日の現状になるまで多少は貢献できたかもしれないが、それは後輩の判断に委ねる。

主の祈りを捧げ、「われらに罪を犯すものをわれらがゆるす如く、われらの罪をもゆるしたまえ」の箇所、毎回私は自分にできていないのかを問う。

まず許さなければ許されないことを受け止めてはいるが、果たして実行できているのか正直なところ自信がないときもある。元首相の狙撃犯の自供から、少し見当違いの恨み晴らしが動機だったとすれば、誰かのせいになければ、心の折り合いがつかなかったのだろうと推察し、そうはしてはならないと身を引きしめる。一人ひとりが他者を許し、自分が許されるよう主に祈ることを願う。敵を愛することの難しさを痛感しているが、出来るようになりたいと望み、心がいとも平和でありたいと願っている。一人ひとりの心の平和が、多くの人々の平和につながることを信じて祈り続けたい。

平和の支配

尾崎幸子

この季節になると日本人なら誰しも平和を願うことだろう。過去の反省に立ち、二度とあの愚行を繰り返さない決意を新たにしよう。しかしながら戦争から多くの時間が流れ、戦争を知らない人間がここまで多数になってしまうと、言い方は悪いが、近年ではこの季節に平和を願うのもある種の風物詩の体を帯びていた気がする。ところが、今年には明らかに様相が違っている。ウクライナ侵攻である。

国が違う国に武力を行使するという大々的な戦争がこの現代に起こるとは、私自身、正直思っていない。しかもあんな大国がある。国際法にも国連憲章にも違反するし、たとえ問題があっても経済制裁や小競り合い程度を繰り返していくものだと思っただけだ。何の権利があつて他国を攻めることができるのか全く理解できない。でもその理解できないこと

が戦争なんだと、形式的な平和を祈る自分に突き付けられた気分だった。しかしながらいつの間にか戦争は遠い所で起こっていること感が日本では蔓延して、今では物価高などの影響以外、あまり話題にもされなくなっている。戦争や紛争のない国際関係における平和よりも、日々の心配事や揉め事のない個人の平和が優先される気持ちはわからなくはない。が、他者の平和に無関心でいて、自分の心の平和は本当に得られるものなのだろうか。先日、札幌に住む友人が「ある日、目が覚めたら札幌市がロシア軍に包囲されていた」という夢を見たと話してくれた。ロシアが目の前に迫る北海道では、遠い所での戦争が普通の心配事として個人の平和を脅かしている。これが身近な現実なのである。

幸い、私たちは恐れを前にしたときにキリストに信頼して歩むことを知っている。平和の構成員として大したことはできないのかもしれないがせめて、キリストの平和が世のすべての人々の心を支配するようにと、この夏は心から祈ろうと思う。

説 教

『祈る心の中心に立つお方』

マタイによる福音書5章43節～48節

聖学院小学校・幼稚園チャプレン 中村謙一



8月15日の終戦記念日が近づいています。ウクライナの戦争がまだ続いています。聖書のみ言葉によって、私たちは主にある平和の祈りを深めて参りましょう。

今から77年前の太平洋戦争中に、宣教師の両親と共に中国にいた英国人のステイブン・メティカフは、14歳で山東省の日本軍捕虜収容所に入れられ劣悪な環境に置かれ苦しみました。ステイブンは、終戦で連合軍に解放された時には飢餓による栄養失調で死ぬところでした。ところが戦後ステイブンは、日本を憎むことなく、宣教師として日本にやってきて東北で36年間も伝道し、日本人に仕えてくださいました。津軽弁で説教ができるこの宣教師に一体何が起ったのでしょうか？

実は、ステイブンは、収容所にいた時には日本人が大嫌いだっただけです。日本兵が中国の一般市

民を殺す現場を目撃したからでした。ステイブンは、収容所内で日本軍に許可されていた聖書研究祈祷会で、「敵を愛せよ」という聖書のみ言葉に激しく反抗し、指導していたある英国の宣教師を困らせました。「僕は殺された中国人のために祈る。日本人のためになんか祈らない」とステイブンは主張しました。しかしその宣教師は、「日本人のために祈る」と宣言しました。彼は、主イエスが共にいてくださる時、私たちの心は自己中心から神中心へと移されたと信じていました。

ステイブンには、もちろん、「日本人のために祈らない」という拒否する自由がありました。ところが、自由な人間の手本であられた主イエスは、父なる神様の御心にお従いする自由をむしろ示されました。それはまさに、45節にもあるように「天の父の子となる

ため」に大切なことでした。天の父なる神様は、悪人にも正しくない者にも広く深い愛をお示くださる完全なるお方でありませぬ。主イエスは、父なる神様を手本とし、愛することにもっとチャレンジせよ、「完全な者となちなさい」と命じておられたのです。

そもそも、父なる神様の御心から離れる自由が人間にとつて正しい自由なのでしょうか。主イエスも十字架に架かる前にゲッセマネの園で、父なる神様の「み心のまに」と苦しみながらも祈ってくださいました。東京神学大学学長の芳賀力先生は、『神学の小径Ⅲ 創造への問い』の中で、ドイツの神学者ヴォルフハルト・パネンベルクが、自己中心的な自由ではなく、「神に自己を開放することにおいてのみ成就しうる」神解放的な自由からの決意が重要であると、『キリスト論要綱』の中で主張していることをご指摘くださっていました。

その後、収容所ではその英国人の宣教師が突然、病気で亡くなってしまいました。その宣教師の葬儀が収容所内で行われました。ス

テイブンも棺を担ぎ、その宣教師を墓に葬りました。そして、まさに棺を担いだその瞬間に、ステイブンの心の中心にしっかりと立たれたお方がおられました。そのお方が、十字架と復活の神の御子、主イエス・キリストでした。立たれただけではありません。主イエスは、聖霊によって十字架の赦す愛をステイブンの魂へと注ぎ、ステイブンの人生を「敵を愛す」人生へと移されました。

ステイブンはこの時に、戦後、宣教師になって日本を伝道する具体的な召命への決意が与えられました。それは、まさに、神解放的な自由へとステイブンが自己を委ねた瞬間でありました。そのような瞬間は、わたしたちにも与えられます。その時には、どうか東京神学大学で学ぶことをお勧めいたします。

さて、2月以來、ロシア軍の大規模な侵攻はまだウクライナで続いています。私たちは、ウクライナとロシアの和解のために祈りましょう。子どもたちが家族と共に元の生活に戻れますように祈りましょう。

教会初夏の集い 2022.6.26

『キリストの恵みに生きる

— 特に、礼拝、伝道、
教育をめぐる』



聖学院大学特任教授
菊地 順 教師

(1) プロテスタント教会と
教育の課題

パウル・ティリツヒは、ローマ・カトリック教会の教会的権威に対する「黙従的信仰」に対し、宗教改革者たちは、信仰者各人が「信仰における恵みの経験をもたなければならぬ」と教えたことを語り、「主体的信仰の確立と教育」の重要性を指摘している。

(2) 宗教改革と教育的取り組み

—— ルターを中心として

主体的信仰の確立は、歴史的に見ると、礼拝の改革、特にその中心である説教の取り組みから始まった。ルターは早い時期からドイ

ツ語での説教を始め、〈信仰は説教によってこそ養われる〉との確信のもと、説教に励んだ。また聖礼典（洗礼と聖餐）を重視したが、それはみ言葉によって支えられなければならないとした。

加えて、ルターは、聖書を原典から翻訳することに着手し、1522年に新約聖書を、また1534年に旧約聖書を出版した。さらにルターは、讃美歌を会衆が歌うものとして積極的に取り入れ、讃美歌を通しての福音の普及に務め、自らも作詩・作曲を行った。

礼拝の改革以外では、カテキズム教育に力を入れた。カテキズムとは、主に洗礼志願者に信仰の主要内容を教えるため、教理を要約したものであるが、宗教改革者たちはこれを積極的に取り入れ、ルターも信徒のみならず聖職者の教育のために『大教理問答』や『小教理問答』を作成した（内容は主に十戒、使徒信条、主の祈り、洗礼と聖餐など）。

(3) 教会外での取り組み

—— 家庭とキリスト教学校

ルターの教育的取り組みの背景

には、〈神の救済史は神による教会、家庭、国家を通しての統治にあり、その統治は「神と人間との〈共働〉」からなる〉という考えがあった。そして、教育に限って言えば、家庭を重視した。ルターは十戒の第五戒「あなたの父と母を敬え」に基づき、地上で神を代表する父と母は、それにふさわしく子を教育する義務があったとした。

また他方、ルターは家庭教育の限界をも痛感し、国民全体を対象とした国民教育の先駆けともなる「キリスト教学校」の設立を呼び掛けた。すなわち、霊的統治と世俗的統治、魂の救済とこの世の保持という、神のこの世の支配の二つの方法に仕えることを課題とした学校の設立の必要性を訴え、その設立に積極的に取り組んだ。

(4) 伝道と教育

—— ティリツヒの視点から

このように、プロテスタント教会は、その初めから教育的取り組みを重視し、それに積極的に取り組んできたが、最後に、特に伝道という視点からキリスト教学校の役割について見ておきたい。

最初に触れたティリツヒは、現代の教育を技術教育、人文主義教育（人格教育）、導入教育の3つに分類しているが、19世紀以降、技術教育が優勢となる中、人文主義教育と導入教育（宗教教育）との連携の必要性を訴えている。すなわち、宗教教育は、何よりも生徒たちの抱く人間の実存的な問いに答えるものでなければならず、そのようにして人文主義教育（主に問いを立てる）と導入教育／宗教教育（主に答える）との連携、及びキリスト教学校と教会との連携（共働）が重要であったとした。

確かに、教育課程にはさまざまな困難があり、また信仰者にも懷疑という困難があるが、ティリツヒによれば、そうした困難は〈霊的現臨〉（聖霊の助け／救済）によって克服されるのである。そのため、ここでは（またそこで）神と人間との〈共働〉が不可欠となる。従って、垂直的次元でも水平的次元でもそれぞれの共働が大切であり、それは今後一層重要になっていくように思われる。

教会初夏の集い報告

6月26日、聖学院大学政治経済学部特任教授の菊地順先生をお招きし「初夏の集い」を開催しました。出席者は50名。菊地先生は、今年の3月まで経堂北教会に在籍し現在西千葉教会で奉仕されている菊地信行伝道師のお父様です。

礼拝では『へりくだって、神と共に歩む』と題し、宣教をしていただきました。ミカの自問自答から「昇らんがために降りなければならなかった」というメッセージ、井深八重という、ハンセン病と診断され療養所に送られた女性がフランス人神父に導かれ受洗、実は誤診だったと判明するも看護師となり、その療養所で生涯神と人々に仕え、「彼女は誤診に『神の摂理を見た』』というお話は大変印象に残りました。

初夏の集いでは『キリストの恵みに生きる―特に、礼拝、伝道、教育をめぐって』というテーマで講演していただきました。前半は主にルターの宗教改革と教育的取組について語られました。ルターの教育思想は「教会・家庭・国家」

の3つを柱とし、中でも家庭が第一であること。そして、神と人々への奉仕、この世の務めに精進できるようにするのが教育の目的で、ルターのいうキリスト者本来の在り方を表しているというお話は非常に興味深く、また「神は我々に我々のうちに働かない。なぜなら神は我々のうちに働いて、我々が神に共働するようになるために造り、維持しておられる」の「共働」がキリスト者として大切と考えさせられました。

後半は菊地先生が長年研究されておられるテリリツヒという神学者について話されました。彼の教育論では人文主義教育と導入教育の連携が謳われ、前者は学校、後者は教会が担い相関性が重要、伝道論では信仰者にも「伝道」が重要とのことでした。菊地先生自身、大学で教務教師を30年間務められた経験から、学生のキリスト教への関心は薄いので、やはり幼少期が大切と話される一方で、学生が「求めている」のも事実という話を伺い、伝道の言葉化の重要性を感じ、豊かな学びの時となりました。

(尾藤美紗子)

長老のファイル

コロナ禍で迎えた3年目の夏。やつと感染が減り通常通りの夏になると思っていたら、再び急拡大して油断できない状況です。国による行動制限がないなか、当教会では今後も感染防止策を行います。休むことなく礼拝を守ってまいります。残念ながら今年もCSキャンプ、バザーは中止となりましたが、ミニバザーなどコロナ禍でも出来ることを行います。

6月26日には聖学院大学の菊地順先生をお招きして初夏の集いを行うことが出来ました。また、7月10日には中村謙一先生に説教をしていただきました。それぞれ、井深八重やステイブン・メティカフ宣教師など神と共に歩んだ先人たちについて語られ、キリスト者として心が奮い立たされました。8月には久保哲哉先生を説教奉仕にお招きし、9月4日には、美竹教会の左近深恵子先生をお招きして振起日礼拝を行います。どうぞ、ご出席または配信にて礼拝をお守りください。

長老会では、2025年3月末の岸先生の退任を見据えて、次の体制を整えるべく、今後どのような教会を目指すか、どのような牧師を招聘するのか検討してまいります。宣教基本方針の見直しが必要です。会堂の補修や牧師館の改修や事務手順の見直しも必須であり、それらに財政的手当が必要で、ウクライナ危機による建築関係への影響も考慮しなければならず、課題は山積みです。

狩野進之佑先生の愛知守山教会でのご活躍をお聞きすると、牧師が与えられ礼拝を守れることは大きな恵みなのだ改めて感じます。また、若い世代へ信仰を繋げていく重要性和その難しさも感じます。主の御心は何かと尋ねるほかにありません。時間は限られていますが、長老会では丁寧に熟考して主の御心を尋ねつつ取組んでまいります。都度つど皆様にご報告していきますが、どうぞ祈りを持ってお支えください。

酷暑のなかでのマスク生活が続きます。体調管理に気を付けて、夏を乗り切ってください。

(酒井由紀子)

牧師の書齋から

先月号に、コロナ禍が落ち着いてホームなどを訪ねることができるようになりましたと書きました。8月は久しぶりに訪問しようと思っていたところ、急激に感染が拡大して、どのホームも面会ができなくなりました。職員にも感染が拡大しているとのことでした。老健施設で暮らしている父は4回ワクチン接種を受けていましたが感染してしまいました。7月上

旬、入院すると連絡がありました。5日後医師から連絡があり、肺炎となり94歳と高齢のため危なかったと言われました。入院は隔離のためとばかり思っていたので驚きました。幸い治療のおかげで今は元の施設に戻ることができました。ただし、全く面会はできませんでした。感染者が増えた今だったら入院も覚束なかったでしょう。

91歳の母は昨夏から特養で生活するようになり、認知症はゆっくと進んでいるものの落ち着いた日々です。こちらのことを分かっているのか分かっていないのか、10分も面会していると上の空になります。孫が面会しても同じようです。ただ、施設の庭に咲く花を見て「きれい」と喜びます。

父は1人で外出できるほどだったのですが、この1年脊椎の圧迫骨折、入院、リハビリ、自宅に戻るとまた入院、リハビリ、で結局老健施設のお世話になることになりました。立ち上がり、多少の歩行は可能ですが、車椅子が基本となりました。それでも自宅で暮らしていた頃より、生活も規則正しくなり元気になりました。しかし、今回の入院でどうなったのでしょうか。今は母と同じ特養に入ることができるようになりました。

同居していた弟が両親の世話をしているのですが、本人も月に1度、有明がん研病院で診察を受ける身です。今のところ再発はありませんが、診察の度にどんな思いなのだろうか……。

こちらは日々の仕事に励みながら、定年目指してどう引き継ぐべきか思案中。妻は日々不要品の処分にも動んでいます。(岸 俊彦)

個人消息



掲示板



- 振起日礼拝 9月4日(日) 午前10:15
説教「目覚めよ、目覚めよ」
イザヤ52:1-10、マルコ13:32-37
左近深恵子牧師(美竹教会)
- 西南支区「平和と核廃絶を祈る会」
9月23日(金) 午後2:00
講演「自然エネルギーが地球を救う」
牛山 泉先生(元足利工業大学学長)

編集後記



▽ウクライナ侵攻の終わりが見えません。世界中の人々が平和を実感できる時がきますように心から祈ります。(酒井)

「栄 光」2022年8月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp